

# プロジェクト研究における 倫理・規範

日本教育工学会第24回全国大会  
平成20年10月12日(日)

授業研究(1)

2a-C103-07

寺谷 愉利子(佛教大学大学院)

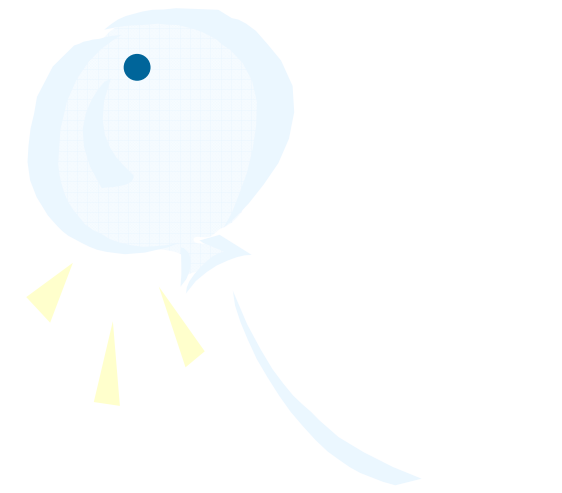
山崎 瞳(佛教大学)

東郷 多津(京都ノートルダム女子大学)

望月 紫帆(NPO法人学習開発研究所)



# 研究背景

- プロジェクトでの授業開発に参加してきたが、うまく適応できないことがあった。
  - 発表者は、その経験をとおして、プロジェクトがうまく機能するためには倫理・規範を提案することが必要だと感じた。
- 



# 研究目的

- 本発表では、筆者の内面的な葛藤に照らしながら、プロジェクトにおける倫理・規範案の作成過程について報告する。



# プロジェクトチームの紹介<sup>-1</sup>

NPO法人学習開発研究所主催のプロジェクト研究

メンバー：

学問分野の異なる大学教員と学習開発研究所所員

活動：

授業研究・授業設計プロジェクト研究

face to face会議 off-line communication

ネットコミュニケーション on-line communication



2008/10/12

日本教育工学会第24回全国大会



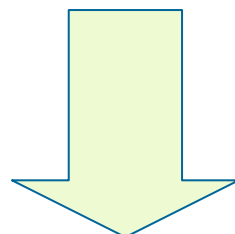
## プロジェクトチームの紹介<sup>-2</sup>

- ・「英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発」
- ・多様な学習者が自律的にWritingのトレーニングに取り組むための学習開発に関する研究
- ・「プロジェクトチームによる授業方法の改善～コミュニケーションツールのログ分析～」
- ・「看護大学における協調自律学習の可能性」



# うまく機能しなかった場面

- ネットコミュニケーションにおいて、意見が一方通行になり、合意形成に結びつかずに授業開発が進まない。



プロジェクトへの  
「エフォートレベル」表明へ

# 表1 エフォートレベル

|   |  |
|---|--|
| 3 | コアで開発・分析メンバーとして参加。<br>開発・分析のどちらもが求められる。<br>メリットは学会(or 学術論文)発表の著者欄<br>に参加。<br>効率的に業績ポイントを稼ぐことが可能。 |
| 2 | ときおりサポート(入力作業など)が可能。<br>発表で連名しなくてもOK.  |
| 1 | 今回は無理。 日本教育工学会第24回全国大会   |

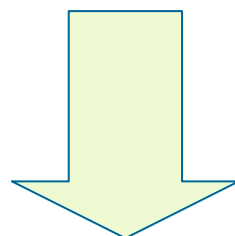
# 発表者のプロジェクト活動の葛藤

一時的なドロップアウト

- 参加方法を見つけられなかった

要因としては、

- 授業経験の違い, 授業方法の違い, コミュニケーション不足がある



参加方法を見つけたかった。  
自分をきっかけにして  
誰もが参加しやすいプロジェクトへしたくて  
みんなに意見を聞いた 事前調査へ



# 「研究者のコラボ方法」のアンケート1

日時: 2008年3月

対象: プロジェクトメンバー5名

ねらい: コミュニティ活性に欠かせない方略作成  
の枠組みの明言化

内容:

1. 倫理規範
2. 行動基準
3. 意見

「日本倫理療法研究所倫理要領 草案」を参考に作成

方法: ネット上の議論

# 「研究者のコラボ方法」のアンケート2

日時: 2008年5月

対象: プロジェクトメンバー5名

ねらい: コミュニティ活性に欠かせない方略作成の枠組みの明言化

内容: プロジェクト運営の葛藤要因

1. エフォートレベルとメンバー規範
2. プロジェクト運営の暗黙の役割
3. 学際間の垣根
4. 研究者の責務(プロジェクトの義務と責任)

方法: ネット上の議論

# 「“研究者のコラボ”のルールと規範」案

「“研究者のコラボ”における倫理・規範」は、  
以下の文献を参考に作成した。

8) 日本心理療法研究所倫理綱領 草案、

[http://shinri.co.jp/jip\\_info/rinri.html](http://shinri.co.jp/jip_info/rinri.html)

第1部倫理規定(用語の定義を含む)

第2部行動基準

第3部実施要領

## 表2 「“研究者のコラボ”のルールと規範」案(未完成)-1

### 1. 「“研究者のコラボ”における倫理・規範」について

- 1) 倫理・規範とは、メンバーとして実践すべき基本的憲章とも言える普遍的なルールである。
- 2) 前提:「メンバーとしての作業」は“研究者のコラボ”の実験事例としての生データとなる。メンバーの了解により研究倫理上の問題をクリアする。
- 3) **人権と人間的尊厳の尊重** すべての人々の基本的人権、人間としての尊厳を尊重し、そのプライバシーの守秘性と自己決定権を尊重する。特に研究対象者となる者に対して、常にその人間的成長と健康を中心に考えた行動をとる。
- 4) **社会的責任** 自らの行為の社会性を認識し、自らの行為が常に他者の存在に支えられていることを自覚し、自らの行為が自らと他者の双方の幸福を促すよう最善の努力を怠る。
- 5) **専門家としての自覚** その与えられた職域の専門性と限界を自覚し、専門家としての自らの見識と技能を常に高める努力をし、**専門家としての責任を果たす努力を惜しまない。**

## 表2 「“研究者のコラボ”のルールと規範」案(未完成)-2

### 2. 「“研究者のコラボ”における行動基準」について

- 1) 「行動基準」とは、「倫理規範」を様々な活動の中で具体化していくうえでのガイドラインとなる。今後、活動別に詳細な倫理コードを設定していく必要がある。
- 2) 前提：プロジェクト活動は、ネットコミュニケーション(on-line communication: Action T.C、Skype)とface to face会議(off-line communication: オフ会)で合意形成をしながら、研究(学習)活動をしている。
- 3) プロジェクト運営に関して(「行動基準」に伴う役割責任など)



# まとめ

倫理・規範案を作成する過程をとおして

- ・メンバーの意見を聞く機会になった。
- ・筆者も自分の居場所、参加方法を見つけることが出来た。
- ・倫理規範案を作成することによって、新たな参加者にも参加しやすい状況を作ることが出来る。



# 今後の課題

- ・今後、さらにメンバーで議論を重ねながら、  
実際に機能する形にしていく。



2008/10/12

日本教育工学会第24回全国大会